

第8回

塩野直道主任による緑表紙の編纂(1933年～1940年)



内蒙古師範大学 客座教授

松宮 哲夫 / まつみや てつお

1933年6月1日茨城県鉾田生まれ。東京を経て大阪で育ち、緑表紙で学んだ最後の世代。

1956年大阪学芸大学数学科卒業。大阪市立天王寺中学校、大阪学芸大学(大阪教育大学)附属天王寺中学校副校長を経て、1981年4月大阪教育大学助教授、教授、同大学付属図書館天王寺分館長を歴任し、1999年3月定年退職。和歌山大学、群馬大学、山形大学、京都教育大学非常勤講師を歴任。数学教育学会相談役。数学教育学、数学教育史、日中数学教育交流史を研究。

古書店巡りと俳句が趣味。

著書：『総合学習の実践と展開—現実性をもつ課題から』(柳本哲と共編著・明治図書)1995

『伝説の算数教科書<緑表紙>—塩野直道の考えたこと』(岩波書店)2007

『数学教育史—文化視野下的中国数学教育』(代欽と共著・北京師範大学出版社)2011

『梨の花—句文集』1999、等がある。

18. 小学算術書新編纂の主任に塩野直道を任命

(1) 数学教育界の状況と主任を引き受ける覚悟

承前。黒表紙は学者や訓導から烈しく批判を受けていた。塩野直道は癪に障り、中村兎茂吉主任を通り越して芝田徹心図書局長に改訂に対する上申書を提出する。局長は主任に下げ渡す。主任は塩野に言った。「これは君が出したそうだが、この案は改訂案ではなくて別の教科書の編集計画だ。自分はやらない」[27]と。結局、塩野は局長より主任として小学算術書の編纂に当たるよう任命されたのである。

当時の状況について、中学校数学教授要目⑦1923～24年、④1930～31年の作成に原案提出者として携わった佐藤良一郎は次のように言う。「特に数学教育に関しては、保守的な空気が強いというよりは、何か新しいことを提案すると、藤沢(利喜太郎)先生あたり何というだろうといったような言葉が出るような有様であった」[28]。(要目④は31年公布、⑦は成案を得ていたのに文部省は発表中止)。1931年当時、藤沢はなお数学・数学教育界の大御所的存在だった。中村主任は東大での恩師藤沢の理念で黒表紙を編纂したので、藤沢が健在である限り新編纂の主任は引き受けないのであった。

以上の状況の中で小学算術書の新編纂の主任を引き受けることは大変な覚悟を必要としたのである。

(2) 小学校令施行規則算術要旨の現代的解釈として許可

小学算術書修正方針案1933年7月5日の一般的事項の第一は「数理思想の開発を主眼とす」⑦である。これは小倉金之助の「数学教育の目的は科学的精神の開発にある」に触発されて作成したもの。科学的精神では算術も理科も一緒になるので算術独自のものを考えたのである。しかしこれは標記の法令1900年に反すると武部欽一普通学務局長に反対された。また法令はいま改正できないとも。しかし塩野は飽く迄頑張り抜き法令の「現代的解釈」として認めさせた。当時軍関係から「日本精神」が盛んに叫ばれた。科学を排斥しようと言えした。そのため塩野は⑦を是非入れたいと考えたのである。その後もう一つ「日常生活の数理的訓練」④を加えた。④だけでは生活算術の卑近な実用主義に墮落する。それを防ぐにも⑦は重要であると主張した。⑦④は1つの両側面であると。

19. 小学算術書編纂会議—1933年9月～1940年10月

(1) 小学算術書編纂委員—当初5名・のち6名

文部省側—2名

塩野直道図書監修官。編纂主任。1898年生34歳。東大物理学科卒

津田一夫図書局嘱託。1907年生26歳。東大数学科卒。1939年秋、八高へ転出。津田の後任は次の者。

森規矩男図書監修官補。1940年4月より会議に参加 任官

は1941年1月。1892年生48歳(推定)

(前田隆一は1939年8月、八高教授から図書監修官に就任。
中学校数学国定教科書編纂の名目。まず国民学校用『カズ
ノホン』編纂の傍ら小学算術(緑表紙)の省内週1回の読
合せにも参加して発言。1907年生32歳。京大数学科卒)

文部省外—文部省教科用図書調査嘱託

安東寿郎東京高師教授。1879年生54歳。東京高師数物科卒。

1929～30年英米独数学教育視察。

柿崎兵部女子学習院教授。1892年生41歳。東京高師数物科

卒。1924年9月より1年半英仏独米数学教育視察。

多田北鳥^{ただほくう}図案家「サンススタジオ」主宰。文部省修身・国語

の絵図挿絵を以前担当。1889年生44歳。

高木佐加枝東京高師附小訓導。1936年10月より参加。1906

年生30歳。東京高師理一卒。また編纂会議を経た

成案を1933年同附小入学一部第一学年を事前の実

験学級、1935年同附小入学一部第一学年を事後の

実験学級とし、各々卒業まで受け持った。

(松本彦三郎大学院生。児童の心理学研究について塩野は
助言を得た。のち図書監修官になったが1946年歿)[29]

(2) 尋常小学算術書編纂会議一虎ノ門文部省庁舎会議室

初回は1933年9月15日(金)、最終回は1940年10月11日
(金)。毎週金曜日午後1時から4時まで。延長するのが普通
だった。会議は7年1か月継続、350回以上である[28②]。

塩野、津田、安東、柿崎、多田の5名が方2間程のテー
ブルを囲み、塩野原案の児童用書のプリントを配布し、塩野が
説明し、塩野が議長となり審議する方式だった。教師用書は
塩野が執筆し国枝元治東京文理科大学教授が校閲した。

審議の経過の最初の方を少し。第1回は第1学年基本方針。

①教材を第1・第2・第3学期にわけ。②第1学期は絵
図、数字を主とする。③第2学期より文章、式を入れる。④
授業時間は大体、第1・第2学期を各々15週として75時間、
第3学期を10週として50時間予定。⑤児童用書は2時間分
の教材を1頁に配当するのが標準。⑥教師用書は頁数を制限
せず、要領、注意、例題、参考書を掲げる。⑦題目は教授内
容及び児童用書を考慮してつける。以上の7つの方針の下に、
数、量、数量的作業、空間学習、時間・暦の各系統、貨幣の
各教材について学期毎の配当を決定した。

次の段階は学期毎に取り扱う教材を大きな題目にわけて、
その順序と内容を決定した。第1学期については次の通り。

①形・大きさ・数

形の概念：まる 四角 三角 まっすぐ 曲がっている、

大小の概念：大きい 小さい、多少の概念：多い少ない

②並べること(以下内容省略) ③数え方(1) ④数え方
(2) ⑤数えること(1) ⑥数字(1) ⑦くらべること ⑧数え
方(3) ⑨数えること(2) ⑩数字(2) 以上第1回の審議分。

第2回(9月22日)と第3回(9月29日)は第2・第3学
期の分、第4回(10月6日)から第9回(途中1回休み)の会
議(11月17日)までの6週間費して第1学期の具体的な題目
と内容を決めた。球入れ、おはじき、ボタンの排列、等[30]。

(続)

引用・参考文献

[27] 塩野直道「青表紙と小倉先生」『科学史と科学教育』小

倉金之助先生古稀記念出版 大日本図書1956 242～248

[28] ①佐藤良一郎「大正末期におけるわが国算術・数学教育
の回顧」8～12、②柿崎兵部「小学算術編さんの思い出」21
～24 『算数と数学』教育総合研究所1963年8月号

[29] 塩野直道『数学教育論』河出書房1947(復刻版啓林館)

[30] 『尋常小学算術』復刻版 啓林館2007全12冊と解説書

(図25の塩野直道の写真は次の著書より。

『随流導流—塩野直道先生の業績と思い出—』啓林館1982)



図25 塩野直道 文部省1935

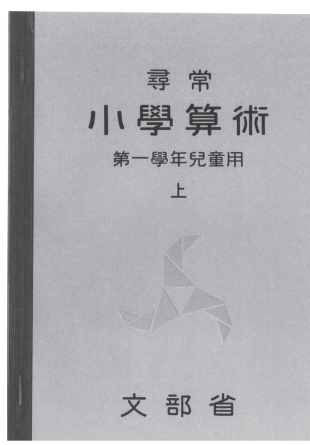


図26 緑表紙児童用一上表紙

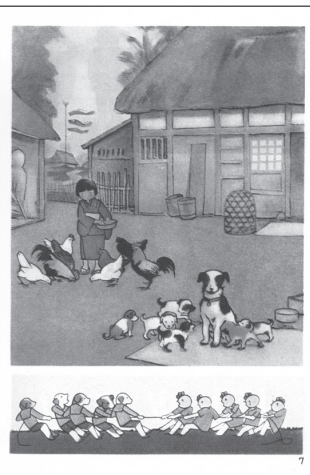
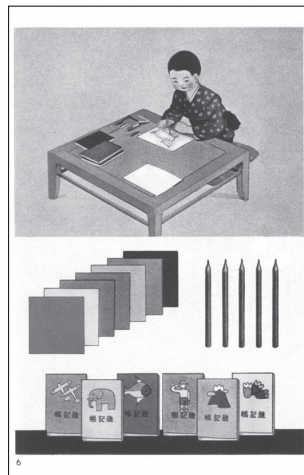


図27 緑表紙児童用一上6～7頁「名数の数へ方」9頁迄